



総合医のサンクチュアリを 目指して

羊蹄医師会

JA北海道厚生連 倶知安厚生病院

稲熊良仁

新専門医制度で、19の専門領域の一つとして総合診療科が認められた。私は2001年卒業なので、総合診療科や総合医の認知度は無いに等しかった当時とは、隔世の感がある。

羊蹄医師会に属する倶知安厚生病院総合診療科は本年度総勢14名と、道内有数の規模となった。業務も外科系以外の救急と内科外来、検診業務、泌尿器科と共同での透析、常時60～90名の入院患者を担当している。当院も例にもれず新臨床研修医制度発足時には医師確保に非常に困った時代もあったが、紆余曲折を経て現在に至る。振り返りながらいくつかのポイントとともに現状を報告したい。

1) モットーは「教育＝共育」

総合医は医局に属さない人も多く、日常診療の幅広さや専門領域が見えにくいと、特に若手を中心にアイデンティティを保ちにくい。当科にはさまざまな背景を持つ医師がおり、最初に科のアイデンティティ、求心力の確立を考えた。そのため科のモットーを「教育＝共育」「Fair and Share」と掲げ、医師集団としての総合力を高めることを目指した。年次やキャリアに関わらず技術知識経験を分かち合い、日々研鑽することがチームワークを高め、アイデンティティを形成すると考えたからである。日常業務の中に、以下のように学びの時間を設けた。
月曜：症例集を元に臨床推論 火曜：抄読会または学会報告 水曜：臨床症例検討会 木曜：プライマリ・ケアレクチャー（早朝）、神経内科カンファレンス（隔週） 金曜：ヒヤリ・ハット（臨床的に危険な事例）カンファレンス、研修医レクチャー

2) お互いさまマインドの育成

お互いに尊重しあい助け合うことができなければメンバーの不満やストレスが溜まり、いつか瓦解してしまう。初期の頃には出張が重なったりした週末などは大変な時もあったが「僻地病院ならむしろこれが当然、これが普通」と率先して助け合った。今も総合診療科ではこのいわば「お互いさまマインド」が共有されている。

3) オン・オフをきちんとする

古き良き時代の完全主治医制は美談ではあるが、疲弊して燃え尽きては継続性はない。医師がオン・オフを明確にしてきちんと休むことは重要な仕事の一つと考えている。当科では夕方の申し送りが終われば、主治医であっても基本的にはオフとなる。緊急時の対応、看取りまで、可能な限り当番医に任せ

ている。若手からベテランまでさまざまな医師が持ち回りで当番を担うのであるから、質の高い情報共有を行い、お互いにリスクや責任を分担することが大切である。そのためカルテやサマリー、朝夕のミーティング、朝の全員回診での口頭プレゼンテーションなどは特に重要視し、常に気付いたことはその場で教え合っている。ここでも「教育＝共育」の精神が浸透し「安心して背中を任せられる同僚」を作ることがオフを支える担保となっている。今では2週間夏休みを取って海外旅行に出ている若手もいるし、出産後に数ヶ月間フレキシブルに年休を取ってイクメンをしている医師もいる。当日子どもが急病になったら半休も気兼ねなく取れる。安心して勤務できる環境であることが人材リクルートにつながると考えている。正直全員が年休を毎年フルに取っても、それが呼び水となって数年働くと優秀な人材が定期的に確保できれば、十分元は取れるのである。

4) 天の時、地の利、人の和

総合医や総合診療科というものが社会的に認知されてきたこと、また院内に内科系の他科の専門医が少なく、総合診療科に任せてもらえる領域が広いことが却って、幅広い臨床を経験できる教育の場になったことは、正しく天の時であった。

地の利。小樽まで1時間、札幌まで2時間という距離はある程度の自己完結性を求められながら、高度専門医療が必要な際には搬送も可能という絶妙な地理にある。夏はドクターヘリで搬送時間は短縮できるが、冬は逆に搬送時間が延びる。これもまた臨床的判断力を鍛えるには絶好の環境である。冬の豪雪も含め、四季の自然は美しく、世界的国際リゾートNISEKOとして発展し続けている地域であり、春夏秋冬のレジャー、多数の温泉も楽しめる。外国人患者も多く、若手には医療英語の実践の場にもなっている。今後10余年で北海道新幹線もやって来る。

和を重んじる人材が毎年集まってきたことは僥倖だった。これほど人数がいながら全員の人格が素晴らしいのは、諸氏に失礼ながら医療現場では奇跡といえるのでは無いだろうか。私の医師キャリアの中ではBest and Brightestである。

以上、手前味噌なようでもあるが当院の総合診療科の現状をお伝えした。個人的には現在の状況に至っても、まだ道半ばと考えている。重要なキーマンの離脱、組織が成長するに従い草創期のメンバーと中途メンバーの対立、大量退職、医療事故などで容易に医療現場が崩壊するのは全てわが身に経験済みである。メンバーとともに「教育＝共育」「自らよりも優秀な医師を育てる」集団となることが未来を決めていくと思う。

このような仕事に携われていることは幸せであるが、全て研修医時代から出会ってきたさまざまな人々、指導医を含め諸先輩方、患者さんたち全ての人のおかげである。医師人生もベテランの域になり、医のバトンを次世代に渡すつもりで、日々感謝しながら北海道の片田舎で生きている。